フィヒテの『知識学(1812)』における現象論

阿部　典子

Die Erscheinungslehre in Fichtes „Wissenschaftslehre(1812)“

Noriko ABE

1．フィヒテの手法

例えば目の前にある（と思われる）机について、「ここに机がある。それはかくかくしかじかである。それでおしまい。」と表明することは、フィヒテによれば、単に事実的知の領域にとどまり続け、それ以上の根拠を問わない態度に基づくとされる。(1) しかしながら日常的な我々の意識はおそらくこのようなあり方をしており、またそれで充分であるようにも思われる。我々の持つ、他者や物や世界についての知はこのような形式において示されているからである。しかもこの意識は、自己自身に関してそれ以上何の根拠も追求されることのない働きであるばかりではなく、日常的にはそもそも働いているということさえ気づかれないような働きであると言ってよいだろう。

フィヒテにとって哲学は、このような事実的な知や意識を超えて、その根拠を明らかにすべきものと捕えられている。それゆえ哲学の課題の一つとして、事実的知の根拠を明らかにし、そのことによって同時に、事実的知によって明らかにされる経験界の根拠を確認するということが挙げられるのである。もちろん、このような哲学の位置付けや課題の内容は哲学一般に共通する事柄であ

近畿大学工学部生物化学工学科
Department of Biotechnology and Chemistry,
School of Engineering, Kinki University

り、フィヒテ独自の立場と言えるわけではない。哲学をそれぞれに特徴付けるものは、課題に取り組む姿勢とその解決結果、つまり知や意識およびその根拠がどのようなものとして捕えられるのか、という点にあると言える。この点に関して、フィヒテを含むドイツ観念論哲学全体の特徴として挙げられるのは、観念論という名称からも明らかなように、問題解決のポイントを意識作用に置き、意識の働きによって知が成立し、その意識作用に対して現われる姿あるいは知として捕えられるものが経験界に他ならないとする点にある。その限りにおいて、経験の世界は現われ出た姿すなわち現象と捕えられる。しかも、現われ出た姿として経験界を位置付ける限り、経験界の実在根拠として、現われ出てくるもとのものにまで探究が進められることになるのである。(2)

また、我々は通常、それぞれ各人が自分の考えや意識に基づいて自分の経験を理解し判断している。そこには普遍的であると評価されて厳密な知として成立しているいわば学的理解から、最も広い意味において知として捕えられる恣意的な個人的理解に至るまで様々な幅があるだろう。ドイツ観念論はこの意識対経験という構造を、単に個人の内面的領域にとどめることなく、個人的意識はその根本において普遍的意識に直結していると捕える。個人的意識は絶対的意識あるいは絶対的理性と名づけられるような絶対性へと結び付けられて、そこから、各個人の意識は共通の形式を持つということが演繹され、この共通の形式において捕えられる限り、経験界の共通理解が可能とされるのである。学的な知の可能性の根拠もここに求められる。

さらにフィヒテに特徴的なことは、フィヒテが特に自己意識に注目したという点である。自己自身に関係することができるという意識の独特な構造すなわち自己関係的構造に着目し、それを明らかにするなかで知の構造解明に取り組み、同時に経験の可能性の根拠を示そうとしたのである。それゆえフィヒテの探求の方向は自己みずからの意識作用へと向かうことになり、知識学を学ぼうとする者に対しても、各人が同じように自己の意識作用へと意識を向けることが要求される。すなわち、知識学という手引書に従って各人が意識作用の遂行を実際に行ない、それを観察するということが要求されるのである。

本論では、このような立場に立つフィヒテ哲学の中から晩年の著作に焦点を合わせ、現象あるいは像の自己関係性という観点から、知として働く人間の意識作用の現われ方を確認してみたい。それに先立ち、フィヒテ全集の解説文に挙げられていた自己関係のモデルを援用(3)しながら、「自己関係」について、そして「自己関係を理解すること」について具体的に検討し、フィヒテの知識学における一般的で抽象的な叙述を理解する手がかりとしてみたい。

2．自己関係的構造

自己意識は自己についての意識であり、フィヒテの用語を用いれば、自己についての像、図式あるいは知と呼ぶことができる。そして、像というあり方は、像という形式において写し出されているものを現わし示すと同時に、自己自身の性格つまり像であって実物そのものではないということも示している。この二つの契機がそろう限りにおいてのみ、それは像として働く。そして一般に記号というものはこういった像の存在性格を持つものを言う。そこで、もっとも身近な記号である言語を用いた表現においてその像構造を確認してみたい。

①「このバラは赤い。」

この文は、このバラは赤いという事態を再現している。しかしもちろん、バラが赤いという事態そのものではなく、日本語の平叙文である。したがって文①は、ある事態を内容として提示し、同時にその提示はどのような形式においてなされているのかを示しており、像に不可欠な二つの契機を同時に示していると言える。これは次の文②と比較するとはっきりする。

②「②は日本語の平叙文である」

この文は、当の文が自己自身においていわば無条件的に示していること、つまり日本語の平叙文であるということのみを言い表している。それゆえ、真なる内容を示してはいるが、しかし内容に関して新たな実質的情報を与えるものではない。

③「「このバラは赤い」は、＜このバラが赤い＞ということを述べている日本語の平叙文である。」

この文は、文①を名詞として含み、かつ①の文が自己自身について無条件的に示している事柄すなわち日本語の平叙文であるということを、改めて表現している。このような文③は文①に対して、メタ言語の文と位置付けられる。実際の場面での使用に関して言えば、赤いバラを指差しながら文①を発言する場合、文①が理解されると予測される限り、文③が発言されることはない。文①の理解には、文③の理解が前提されているために、ことさら確認する必要がないからかである。このことは以下の英語表現で確認するとはっきりする。

①´「This rose is red.」

③´「「This rose is red.」は、＜このバラが赤い＞ということを述べている英語の平叙文である。」

そして、さらに次の文が可能である。

④「私は文①「このバラは赤い」の使用を考察する。」

この文は、これまでの私の働き全体を対象としている。文①では実際の使用場面が想定され、発言内容の対象はバラである。そして、この文①の使用を考察

することによって実際の会話状況から離れ、文①を対象とするメタ言語の次元で働くようになると文③が成立し、その上で、以上の事柄すべてを考察するのが文④である。それゆえ、文④は「2 階のメタ言語的次元」で働いていると考えられる。また、文④は私がここで行なってきたことの再確認であり、その意味で自己確認の表現と言える。

以上の各文を、フィヒテの用語である像ないし図式という表現を用いながら捕えなおしてみる。文①が真なる命題であれば、文①は事実的世界の像と言うことができる。そしてこの次元を図式Ⅰとする。さらに、実際に文①が発言される場面では常に文③は発言可能である。フィヒテは文③の次元を図式Ⅱとする。それは以下の理由による。文③は事実的世界の像である文①を名詞としてもう一度捕えなおしており、したがって文③においては「文①である事実的世界の像」の像が成立している。また、文③は文①の理解形式である日本語の平叙文という点を明記しているため、文③は文①の像としての性格を示している。それゆえ、事実的世界が文①に写し出されたように、文①が文③に写し出されていると考えられるからである。文④ではここで今まで何がなされていたのかということが示されており、従って、実際の考察全体を捕えた表現として、考察全体の像であると言える。これは知識学そのものの立場と位置付けられ、図式Ⅰと図式Ⅱを写し出す図式Ⅲとなる。

以上のような理解の流れがうまく行なわれれば、知識学における自己関係的構造の叙述は理解しやすくなるように思われる。しかしながら、知識学で明らかにしようとする自己関係的構造は上記の例よりも複雑になる。フィヒテが明らかにしようとするのは自己意識の自己関係的構造であるため、その構造は「厳密に再帰的構造」をとるからである。上記の例では、文は文自身に対して像として現われるのではなく、我々に対して像として現われる。我々はもともと外的に成立している文の構造を自己関係的として理解すればよいことになるため、その構造は見えやすいと言えるのである。そこでその構造を理解の手がかりとしながら、以下で自己意識の自己関係的構造を確認してみたい。

3．知の二つの領域

一般に知とは、「～（について）の知」という関係において「～」という対象の部分に知の働きが向けられて、この対象が明らかにされたものを言う。フィヒテはこのような知を事実的知と呼ぶ。そしてこの「事実的知を終わり」(S.328)[4] にして、知そのものの構造を明らかにする方向に向かうところに哲学の領域が開かれるとする。それゆえフィヒテの哲学は「知の学説、知の理論、知の学」(S.317)と特徴付けられ、その特徴を明示するために、哲学の中心的著

作は『知識学』と名づけられることになる。

ところが、知の働きの現場すなわち事実的知が働いているところでは、知はその対象に向かうのみであり、知自身の働きに目が向けられることはない。「何かを知る限り、自己については知らない」ということが「すべての事実的知の根本法則」(S.318)としてあるからである。事実的知において知は自己自身の働きにいわば没頭しており、またそうすることによって知はよく働くと言える。しかしながら知の働きがそのようなものであるならば、知そのものの構造を明らかにするという知識学の要求はどのようにして遂行されるのだろうか。フィヒテはこれを「現場の外で取り押さえる」(S.319)ことによって可能になると考えた。そしてその試みそのものが知識学として提示されてくるのである。それゆえ知識学の中で、事実的知における知の働きの法則やその概念、そしてフィヒテの用語で言えばその「像」が明らかになることが期待される。

ここから、知識学の成立によって知の二つの領域が区別されることになる。一つは事実的な知の領域であり、もう一つはこの事実的知を超えて高まり、知の法則性が明らかにされる知の領域である。前者の領域では、知は対象としての他者に向かう。いわば知は自己の外に向かうことになるのである。後者の領域では知は自己自身に向かう。フィヒテは知の働きのこの方向を「自己内環帰」(S.337)と呼んでいる。それゆえ、知識学で遂行されるのは知の自己内環帰の働きであることになる。

ところが自己内環帰の作用は、前述の「～についての知」という形式で示される事実的知とは別の領域で働くために、この形式において理解されることはない。事実的な知の領域におけるように、知の完了した結果として捕えることはできないのである。知識学を理解するために必要なフィヒテの特徴的要求がここに示されることになる。それは、知識学を理解するために、知識学を読み進む読者自身が知の立場に立ち、みずからが自己内環帰の活動を遂行して、みずからの活動を見る、ということである。このことからフィヒテは事実的知の領域を「客観的に語る」(S.319)と言い、一方、自己内環帰の領域は「我々自身である」と言うのである。

このような自己内環帰の領域は、また、反省と呼ばれる領域でもある。フィヒテの哲学はフィヒテが哲学を講義していた当時から、「単なる反省体系にすぎない」という批判の声があがっていた。それは反省の持つ以下のような特質に起因すると考えられる。事実的知の領域における知は、知自身の働きに没頭している。つまり、知はひたすらその客観に向かい、そこには知のあり方そのものに関する対立や疑いが生じる隙間はなく、知という働きそのものは無条件的に正しい。しかし、知がいったん反省されると、知のあり方そのものが考察されて、知の特徴が明らかになる。すなわち、客観はそのあるがままの姿で知

の中に存在するのではなく、知という姿をとって捕えられているという構造が見えてくるのである。ここに、知の法則を捕えるに先だって、まず知とその客観との分離や対立が確認されることになる。それゆえ、例えば、知として理解される姿は客観のありのままの姿であるのかどうか、知の作用によって客観は何らかの変更を余儀なくされることはないのか、などの疑問が生じてくるのである。あるいはまた、知にとって直接的なものは「客観についての知」であり、決して「客観そのもの」ではないために、知という媒体を経ることによって客観の実在性は抜け落ちてしまう。そのため、知は実在性そのものを告げるわけではないということが示されてくるのである。知とはそもそも実在性に対してこのようなアプローチをするということが反省によって明らかになるのであるが、そのような知をてがかりとし、またその構造解明からその他の事象を説明しようとする知識学の手法は、さらにはニヒリズムとして非難されることにもなるのである。もちろんフィヒテ自身はこのような知の構造を知の本質として積極的に捕え、1812年の知識学では、知によって明らかにされる姿を「現象」、「図式」、あるいは「像」と表現し、その詳細な構造を確認していくのである。

このような反省の特徴を捕えたフィヒテ自身も、「一切の反省は実在性を破壊する」(S.325)と述べている。しかしながら、実在性を破壊する反省作用は、また同時に実在性を回復する手段をも持つ。知が捕えるものは像であるが、像であるのは知によって捕えられたものばかりでない。知の構造が反省され、そのあり方が捕えられると、知自身も同様に像という構造をとっていることが分かる。このことをフィヒテは、「知は自己を通じて自己を単なる図式として告げるのみ」(S.325)であると述べている。それゆえ、反省を経ることによって、知は自己みずからの存在の確実性のために、知として現われ出る根源の実在性を要請せざるをえないことになる。ここに、知の客観の実在性を疑問視した同じ反省によって、知自身の実在性が要請されることになるのである。そしてこの実在性は単に要請されるものにとどまるのではなく、知が我々にとってもっとも確実で身近な事実である限り、知の実在性は確実に「在る」ものと捕えられるようになる。しかしながらこのことが明らかになるためには、実在性を破壊する段階で反省をやめることなく、終わりまで反省し尽くすことが必要である。そして直接的客観への没頭という事実的あり方からいったん離れることを反省と呼ぶならば、終わりまで反省し尽くすためには、「すべての事実的法則から身を引き離すこと」(S.326)が必要とされる。知識学の理解においては、まずこのことが前提されるのである。

4．現象と自己現象

前述のように、何かを理解する時に我々にもっとも直接的に現われ、事実であると思われるものは知であり、そして、知の対象が一般的な意味での事実的存在である。フィヒテはこの知と事実的存在の関係構造を捕えた上で「事実的知を終わり」にし、そこに要請された領域を絶対的な領域として、絶対的存在あるいは絶対者と呼んだ。(5) そしてこの絶対的存在には、自立的である、生成変化せず自己同一である、多様ではなく一である、等々の述語付けが試みられる。しかし、厳密な意味においてはただ「在る」ということのみが絶対的存在に関して言われうるのであり、そしてまた逆に、厳密な意味で「在る」と言えるのは絶対的存在のみであるとフィヒテは捕えた。それゆえ、普通の意味での事実的存在には別のあり方が割り当てられることになるのである。

絶対的存在は「在る」ということ以外には何も正しく表現することができないために、知識学は絶対的存在から始まるのではなく、絶対的存在の概念あるいは知すなわち絶対的存在の現われである現象から始まる。そしてもちろん、事実的に我々が知りうるのは絶対的存在の存在そのものではなく、現象としての単なる知のみであることは言うまでもない。絶対的存在の知があるということを、フィヒテは「絶対者の現象は現象する」と表現し、1812年の知識学においては、この考察から始められることになる。

絶対的存在に関して「在る」ということ以外に何も捕えられないならば、絶対的存在が現象するということは絶対的存在そのものから直接的に理解されることではない。フィヒテは、我々が絶対的存在の知を持つということから、この知の事実を根拠として、絶対的存在のあり方に「現象する」という活動性を付け加えるのである。ここで考えられている現象の活動性は、絶対的存在の絶対性を何ら損なうものではなく、従って、絶対的存在は、そのあるがままの絶対的なあり方で現象のうちに現象するというあり方が考えられている。この現象活動がどのようなものであるかを具体的には言い表すことは不可能であり、直接的にはわからないままである。我々に捕えられうるのは、この絶対的存在の現象活動の現われとして、絶対的存在の知がある、ということのみである。以上のことをフィヒテは「絶対者はそのあるがままに現象のうちで現象する」(S.338)とまとめ、ここに図式Ⅰの成立を位置付ける。

何か或るものについての像が成立している時、それが像であって実物ではないこと、あるいは、どのような形式の像であるのかということは、その像自身が示している。すなわち、「自己の像性を性格づける」(S.337)のはその当の像自身である。それゆえ、絶対的存在の現象として現われ出た像は、その像自身が自己の像としての性格をおのずから指し示しているはずである。フィヒテはこのことを「現象は自己自身に対して現象する」(S.337)と述べる。そしてここに成立するのが図式Ⅱである。図式Ⅰの「現象は現象する」という次元では、現象

は絶対的存在のその絶対性のままに現われ出ている。従って現象の絶対的存在であり、図式Ｉにおいて現象は絶対的なあり方をしていると捕えられなければならないが、現象自身にとってそのようにあるわけではない。すなわち、これは現象の現われではあるが、現象自身にとってはまだ現われとして認められていないままであるということである。この最初の現象が、自己に対してという形式をとることによって、みずからのあり方をみずからに対して明らかにすることになるのである。この自己現象という現象活動のいわば確認作業、あるいは自己自身の二重化を経ることによって、新たな特性が示される。フィヒテはこの二重化によって先の絶対的なあり方が「無限の変転」(S.338)の領域に開かれたと見る。つまり、多様性の原型、分裂の原初的形式がここに成立していると見るのである。それは具体的には主客の分離として捕えられる。現象がそれに対して現象するところのものすなわち主観と、現象するものすなわち像の中で再現されるものとしての客観との区別が生じているからである。これが絶対性から生じる最初の分裂である。

さらに、「現象は自己に対して現象する」という構造は、知の作用のもっとも基本的な構造であり、像としての知が自らを作り出す形式を表しているとフィヒテは捕えた。そのため、現象の自己現象という形式を分析していくことが、今や「知識学の本来的課題」(S.339)になってくるのである。そして現象の自己現象という形式は自己に向かう方向を取るために、「自己内還帰の形式」(S.339)と同じであることが確認される。これは初期の知識学で明らかにされた自我の本来的活動性[6]と同じものであり、自己自身に関係する活動の基本的形式である。それゆえまた自己意識の基本的形式が導かれたことになる。

ここに至ってこれまで述べられてきた現象が、意識ないしは知としての我々自身のあり方であるということが確認される。[7] そもそも知識学を読み進む読者には自己内で意識的に確認をするようフィヒテは何度も求めたのであるが、ここで明確に、絶対的存在の現象ないし知の本質的構造が、自我として我々のあり方そのものであることが示されるのである。それゆえこのあとの知識学は、自己に対して現象するという自己現象作用の構造をより細分化して考察していくことになるのである。

5．日常的理解と知識学

日常的に我々が「ここに机がある」と語ることができる領域あるいは前述の文①が捕える領域を、事実的存在がある領域と捕えるとするならば、この領域は知識学においては「絶対的存在の現象が現象する」と表現される次元である。日常的に「事実的存在」と捕えられているものは、知識学においては「絶対的存在の

現象」であり、日常的に「ある」と語られる事態は、知識学においては「現象している」と捕えられる。これが図式Ⅰであった。

文③の場面、あるいは、日常的には文③が実際に語られる場面は極めて少なく、実際には、現実に文①が語られてそれが理解されているという会話状態のことであるが、このような場面は知識学において「現象は自己に対して現象する」と捕えられた図式Ⅱの次元であることになる。従って現象の自己現象とは、日常的に知が使用され、知が生成されている現場での知であると言える。現場で事実的に知が知として働いている時には、知の像性の理解ということが暗黙のうちに前提されているのであるが、普通はこのことに気づかれることはない。前提が気づかれないままであるという点が、むしろ事実的知の特徴であった。このことをフィヒテは「事実的知はそれ自身には隠されたままの法則に従っており」、この隠された作用というのが「自己現象するという作用、自己内環帰する生における現象」(S.340)であると述べている。日常的に我々は像として完成している現象を見るのみであり、それに対して知識学は「自己現象する作用のうちにある現象」を見るために、自己現象する作用そのものをもう一度像として捕えることができるのである。前述の文④に対応するのがこの次元であり、先に知識学が知の構造を捕える方法として述べた「現場の外で取り押さえる」働きが行われたのである。

知識学全体を見た場合、その理解の順序は、「事実的知」から「知一般の形式」に向かい、そこから知の存在根拠としての「絶対的存在」に至る。また、知識学によって明らかにされた存在の順序は、最も根源的なものとしての「絶対的存在」、次いで現象としての「知一般」、そして現象の現象としての「事実的知」、さらに、本論では触れることがなかったが、事実的知に対応する「事実的存在」と基礎付けられる。一方日常的には、理解の順序や存在の順序は、まず「事実的存在」、次いで「事実的知」と捕えられているとしてよいだろう。日常的には知識学で言う絶対的存在の次元はほとんど存在してないということも言えるだろう。また逆に、絶対的存在の領域から言えば、日常的知の領域はそれのみ独立させてしまうとまったくの無でしかないと言えるのである。

一般的な意味での事実的存在は、様々な次元あるいは領域から理解が可能である。日常的な理解はもちろんのこと、哲学的な理解の仕方やあるいは科学的な理解の仕方を異なる次元として挙げることもできるだろう。各人はどれか一つの次元を選択するか、または場合に応じてうまく選択し分けるのか、あるいは現にある次元にとどまりつづけるのか、またはすべてを総合的に見とおせるような立場に立とうとするのか、さらには自分が立っている次元を自覚することができるのかどうか。フィヒテが言うように、それは各人の自由であり、最終的には各人の確信によるものと言えるのだろう。(8) そしておそらく、確信は

先入観を持たずに見る目によってより正しい確信になっていくものである。フィヒテの叙述には視覚の比喩が非常に多く用いられているが、このことも見ることの重要性あるいは見ることと知の不可分な関係性を示していると思われる。フィヒテにとっては、自己関係的構造を持つ知が、フィヒテ自身や世界、さらには絶対性との接点になっていたと言えるだろう。

注

（1） フィヒテ自身は「諸物が存在し、それらはかくかくであり、それでよし」という表現でしばしば事実的知のあり方を示している。

（2） 例えばカントはこれを「物自体」と捕らえた。物自体の解釈はフィヒテにとってもみずからの哲学の方向を決める契機の一つとなった。

（3） 『フィヒテ全集第 19 巻』600 ページ以下。ここで使用されているモデルがフィヒテの意図を理解するために大変役に立つと筆者には感じられた。ここにその一部を援用させて頂いた。

（4） Fichtes Werke herausgegeben von I.H.Fichte X からの引用である。同書からの引用は本文中にそのページ数を記した。

（5） フィヒテは生涯にわたって何度か『知識学』を著しているが、絶対的存在に至るまでの過程は前期に明らかにされている。後期には主として、絶対的存在から意識や知そして事実的存在を論理的に導出することが試みられている。

（6） 初期の知識学は自我哲学と特徴付けられるが、そこで明らかにされる自我の本質的活動は、「端的に自己を定立」し、さらに定立された自己において「或るものとして自己を定立」するいう定立の繰り返しにある。そして、この「として」という構造に自我の自覚が示される。

（7） フィヒテのこのような叙述には循環が認められる。知の根拠として絶対的存在を要請し、逆に、絶対的存在の現象を知として捕えるからである。しかしながらフィヒテはこの循環を叙述の正しさの証拠としてむしろ積極的に捕えている。

（8） 例えば『知識学への第一序論（1797)』では「人がどのような哲学を選ぶかは、その人がどのような人であるかによる」とフィヒテは述べている。